

小林研一郎ハンガリーデビュー30周年

1974年4月、ハンガリー国営テレビ主催の第一回国際指揮者コンクールがブダペストで開催された。55名の参加者が三次にわたる予選と3週間の時間を使って淘汰され、6名が最終審査に残った。ハンガリーの巨匠フェレンチックを審査委員長とする14名の国際審査員が、持ち点20点で点数を付けていく。最低と最高を除く12名の採点合計が、各予選での得点となる。指揮が終わると同時に、体操競技のように審査委員が得点を表示し、テレビ画面には合計得点が掲示される。第一次予選から最終審査まで、ハンガリー国営テレビは審査の様子を中継し、ハンガリー国民は毎夜、初めての国際コンクールの行方を一喜一憂して楽しんだ。

日本から参加した小林研一郎は、第一次予選から三次予選まで、すべて一位で通過するという快挙をなし遂げ、最終審査を迎えた。5月9日の最終審査は、現代曲の新曲とベートーベンの交響曲。選曲は抽選で、最終審査2日前に決められ、練習の時間が与えられる。小林に与えられたのは、ボザイの新曲と予感があり前もって準備していた「田園」。他の参加者が新曲に苦戦する中、得意の暗記力を発揮して、暗譜でこの新曲を振り、「田園」も卒なくこなし、見事、一位の栄冠を獲得した。コンクール終了から審査発表まで、4時間にわたる審査が続けられた。二位は現在国立オペラ劇場で活躍するハンガリーのメデヴェツキー・アーダムだった。

翌日のガラコンサートには大勢の人が押し寄せ、リスト学院大ホールの扉をすべて開き、聴衆のためにロビーが開放されるという異例の事態になった。小林はシュトラウスの「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」を振り、熱狂的な拍手を受けた。続く5月15日の優勝者記念コンサートでは、ハンガリー放送交響楽団を相手に、「田園」と「幻想交響曲」振った。コンサートの後、聴衆が楽屋に押しかけ、1時間も立ち往生するという熱狂的な歓迎を受けた。こ

うして、小林研一郎は、一月にして、ハンガリーのヒーローになったのである。

それからもう30年の時が経った。当時のテレビ中継を知る人も、次第に高齢化し、第一回コンクールの物語は伝説と化した。通常、指揮者は楽譜に注意を払いながら指揮をする。しかし、小林は暗譜で振る。明快な動作と指示でオーケストラを引っ張る小林の指揮振りは、指揮にたいする聴衆の常識を覆した。指揮者とは原曲を忠実に再現する監督者ではなく、指揮者の解釈と思いを明瞭に表現し伝える伝道師だと。

面白い話を聞いた。小林の出現で、ハンガリーのクラシックファンが増えたという。テレビ中継によるコンクールは、日頃、クラシックに縁のない人までをテレビに釘付けにした。スポーツ競技を見ているようなコンクールで、視聴者の音楽にたいする関心が高まった。そして、人々はヒーロー小林の指揮を「見る」ために、小林の音楽会に足繁く通うようになったというのである。私もまた、ハンガリーでの小林との出会いがなかったなら、シンフォニーとの出会いはなかった。

フェレンチック死去の後、空席になっていた国立交響楽団の首席指揮者に、小林が選ばれた。1987年のことである。楽団員の投票で選ばれた。こうした選ばれ方も非常に珍しい。一般聴衆だけでなく、楽団員にとっても、小林の指揮振りが魅力的なのだ。

小林研一郎はハンガリーが輩出した国際的スターだと言える。油が乗りきっている小林は、今、日本でも引っ張りだこである。年に1~2度のハンガリー公演は、常に熱狂的な聴衆で占められる。チケットを獲得するのが難しい。ちょうど10年前、オープンして間もないケンピンスキーホテルで、ハンガリーデビュー20周年を祝った。そして、この10月5日、ハンガリー科学アカデミー大ホールで、30周年のお祝いコンサートが開かれる。 (2004年9月、盛田常夫)